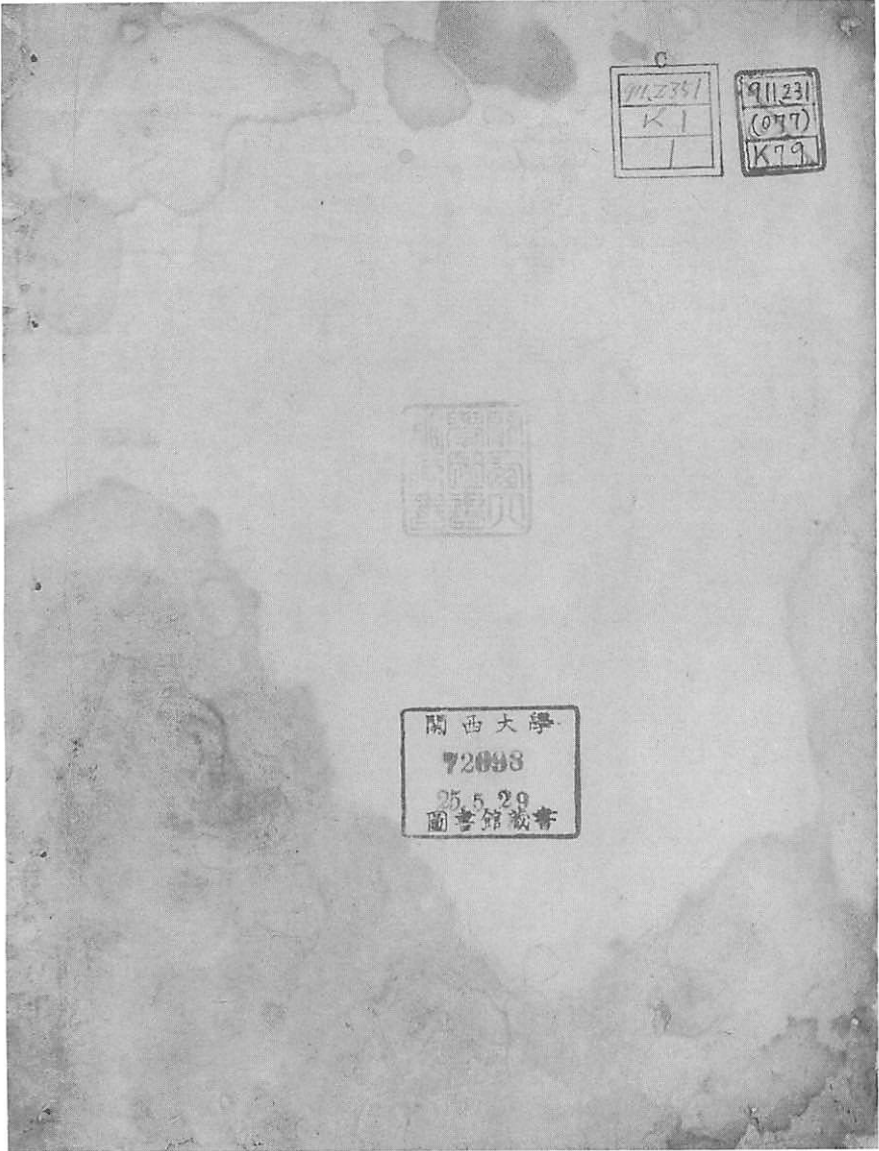


古今序聞書





第一大和音と云事



第二花と鳴常ありす心加つ法の事

第三目よとえぬ鬼神と云事

せと云事

第四天地ひらけはまをける所と云

第五あまけりさほのく久壽神史

神成と云事

第六代よはたなるま久方此天と云

きこてる娘よ娘ると云事

第七あゝ今のほらにしてと云事

第八かくてう花とめで名をうらわじと云

第九をき取も包立あゝもよも娘也

云事

第十親波津の歌は出乃乃御娘等云事

第十一歌のさき大なると云事

第十二と世伸父もつこ人の心花よ

かなるとも事

第十三右のよし乃御の等とさる

第十四礼をさしととも事

第十五さし石小たんととも事

第十六筆はつりふりて人をこひとも事

第十七ね虫のきい友と共な事

第十八さゆすののねとあひか

の根いとさる

第十九男山肴を以てよきなり一廿一河を

くわらしむる

第十七松山ふをくしけり事

第十九一松申の信の城くもさる

第十八二秋ときの下流とありとさる

第十八三曉の志きたてのさきとさる

第十八四常陸川城ひくし世中を恨とさる

第十八五男を乃らふもたれとさる

第六六なるものははるかるかゝらむ
 第六七にわきまはの位持人九と云ふ
 第六八秋の夕に誰田河に流るる雲と
 六乃由目と綿と見給と云ふ
 第六九山色赤人と云人ありと云ふ
 第六十人々として玉等と云ふ
 第六十一僧正遍照等云ふ
 第六十二在原業平は平城天皇の孫と

保親王の次男信直の同親王をりた
心の中をりともる

第廿三文屋康秀ともる

第廿四守治山森權ともる

第廿五小村小町ハ右の衣通姫の流也

ともる

第廿六伴里直ともる

第廿七すくもこのむれあめの下ともる

あせり
かゝらぬ家隆之流の書たる後、染
と先知んたあり書也癖業なり可
見明じ由書



古今席園書

右二の世は流布の中より才三の不同定
家と陸行家也其くは定家と陸行家也
説おろしき事也其くは陸行家
は後成郷の才子なり定家の後成郷は
嫡子也仍家の既よむ統く之家陸行家
も其才不き並肩と者也惟も今も
流もきて一雙の新仙と被云り者御

有故也。曠の大納言經信卿多御院より
音の道より七ヶ条の大事。汝有湯尋
事にり。乞不荒悟。問。何吉。七日系
籠。大納言。汝。新撰。七日。満する
事。起。若。一人。現。て。經。信。卿。と。問。云。汝
何事。汝。新撰。する。う。や。答。云。我。御。心。り
七の大事。と。有。御。尋。問。答。せ。ふ。事。を。以
先。中。さん。答。よ。新。中。也。と。云。さ。て。は。女。不

に安福之事也不_レ及_レ中_レ四_レ本_レとては
不_レ盡_レと一_レと一_レ卷の中_レ示_レ半_レ証_レ信
采_レ之作_レ書_レと六_レ卷と和_レ風_レ同_レ答_レ神_レ改_レ風
傳_レと云_レ六_レ卷_レと_レ以_レ知_レ顯_レと名_レ付_レく仍_レ家_レ隆
為_レ成一_レ義_レ彼_レ風_レ傳_レと感_レ得_レて定_レ家_レの流
と義_レと_レか_レく字_レと改_レて一_レ流_レとする也能
然_レ定_レ家_レの_レ不_レ許_レくと_レ彼_レ証_レ信_レの_レ書_レと
し_レら_レとも_レ不_レ受_レと_レ血_レ脉_レ者_レ筆_レか_レ一_レ流

一義哉仍赤家の末流とすることと云ふ人
彼支流の不同は双紙と書にも家隆
よつた引ねて申より書之と云ふ
序の始と讀にも定家よはやまの
よまの 家隆よはやまの 讀たる

大和哥と云事

大和哥と云事よ有二義大よわらへ

昔もやゝは天竺には礼文とて
道とて延ぶ事あり去と羅什三藏
傳て唐古の爲詩賦彼詩賦聖武の
道慈律師とて人傳く回中の
是別三國やりつけ來放り大和
ころや回中の回中開闢の始り
今に去も去詠歌不絶るに道慈
の人もや彼六義と傳より大和

吾も名付間色因れもするや答もは吾も
道意之ともし私するとも意もあはれ
と傳るりともや仍神代の音にも六義
法を足一たりともと人不知る
故よ六の果とも吾も道意傳る好見
之と皆六儀具足の方けるを甚と延
の西内内覽一出て始と音の六義
吾も法會も信る大和音とも事は

六義は付く初と云ふ也二はただけき或士
國よく想鬼神有り或は言ふよんは或ら
らる故は夫よりわらへるる事なり

△花の鳴管水よすし蛙の事

是より二義一は常くも此中へ始
になき蛙ハ虫の中へ始にわく物なる
よはあはれ或は等して一切括るるは顯也
云二よは日本記云孝謙天皇の内時

大和山寺圓寺二人の傳あり寂也其
児を指たりける。及児俄に地獄より
是を悲歎するなり其限雖然月日滿
るるに死よと歎漸落く成想遠以
經て或遠の事なあり聞たる傳記
よ常能來て本傳て鳴く。其聲淺國
に初陽毎朝來不相還本栖と鳴く
あやここと書て尺牘にけつを此

却つともいふ事なれどもあつたやうなるを
のすまらじにも云ふや聞之は彼僧傳
児生を整て嘗とやまじつと云事
ふ知しと云氣傷の渡を流て程に
吊之云（わは号万葉よ當れ号と入
り亦同日本記云貫之は代の先祖に
き夜も紀良貞と云人の志業と爲て
信吉の廣よりたゞけるよ不思議

うつろき女ありは種々に云かりて
後會と決程と歎と志あり必
げ候へ来後行ありと決て別思好
又彼契一此位志の濟を尋て相見
しにとこれん不思然なきかるるか
下る飛たるおとほいととるゝも是跡
まらんまてし文字也 位志のけま此海松
もつとまてわのかりにも人よ又さほとある

こゝろをいよみて彼女の如く此化現也
中知ぬけ音も同の葉よかけのの音
も入まらぬもいよゝゝ響かす此姿よて
あつし讀むる不思議と歌ん者よ書之
きよききて花よ鳴響ありは位経と云
や次いよかゝりける物音を讀むまの
ゆきの三十字此数とつゝおそ一切
生類皆音を讀むと云りあはれは

別のですら也。七の故は法界の衆生皆
五の行所成也。五の志五のり七の常也
依之よ音五七又七の又句又行
て有也。是亦仁義礼智信の五常也
先中一の句と本句と云ハ本ハ東と
所ハ東と云ハ東ハ方の始也。故ハ中一
ハ始也。是誠仁ハあるに仁ハ万相合
する義也。故ハ初の又句一是此完

二一と世一字とつゞきくる心也別仁の
 義也亦二句若火句也火の礼也礼の禮を
 致す心也是別亦一句の詞を致して
 亦二句の甚心も交して二事するにす
 義別亦一の句もさる敬する少てさ
 故も亦二句礼の句もさる也亦三の金句
 也今の義也儀の貴罰と明ふして理
 也と礼也仍亦三句の理也と律に

世に白く物乃心と歌也故に儀乃白と
と亦に白く玉也信也信は水動の義也
之故に是と土ともいふ所の申は玉地
盤にして其動轉也されは音の何れも
亦に白くはよるるに一は白くやきを
腰とれは名付て音の脚小も合ふ
也仍世白と一首の大意として音の
姿と定むとみ所の申は土の玉と也

余の行は拵するも替るや故よ土白
とせりや亦又ハ水白やあハ智也賀
も得よ一て也とし別するべされハ
よハ亦又白ふてていんを定てに
り得けしと甚心不用水ハ也性信潔
に一てげもしたるものよすいさゆも
はん世を徳あるはなハ亦又白ふ
の姿も極て其の由と歌と故ふ

水白する也是地にて一切生類の皆五
行成可也生類音と爲する小水の音
なる故也皆又音福と爲する也是とき
こいける物音をよむと云也問云若
ば心なきも万物皆又行はば成て法界
皆音と可讀何う奉旨悟深此悟成
言此は義少して此悟は本も皆音と
讀也長能く和記云和音は是より乃

天地の又別の性ふまを天を云い又別の
神は邪なるを地を云い又別の乃
富なるは世一字の奇詠をなせられた
天地をも令動搖也

目よ之ぬ鬼神をも各々思

いせとも事

この鬼神乃奇ふあはるゝと云也先
鬼乃奇にあはるゝと云日本記に天

智天竺の山内藤原の一方が軍と云人
あり鼻息は言ふくくして伊賀伊豫
あまを掠領して不火千今依之時將
軍と為せしめて黄之を後よ不應勅祭
是ハ不念彼も方に人の鬼を付ふ所
謂風鬼金鬼水鬼一鬼也風鬼ハ風と也
欵陳を吹破り金鬼は其力堅固す
志て射すも矢も不立切も其痛水

鬼の氷を成て流矢ひ一鬼の数千騎の亦
よ立て勢も鬼も徳あやめば限不思
儀く間いくの軍云向ふ下も降伏彼
を不可叶而或内紀朝雄の中納言は
大納言して責之ぬめは小叶朝雄中納言
思振は去方ぬは怒之をけはも極て
心もかどらるぬぬぬぬぬぬぬぬぬ
なる必を知せぬは一定捨て去る

も可なり甚んを令知とし一首の音をも
送侍 土も木をけり天の心を道は
いつくり鬼の宿も定んまは音と見
て始ても方々を道の心は知ぬ必素
は巨く鬼換て去ぬかり令剛の城も
ひこめてる方々も畢も別鬼の音
にめはる神授也次神の音小あつる
と神能多今うに公前は伊勢物語

のんと思ひぬる也 伊勢物語小文徳天皇
天安元年正月廿八日 仁吉行事あり
この内業平内信はる千時ひまわり玉恒素蘇
社以乾坤天は翻惠風心は治け内業平
一首の音も清くせ大内神 伊勢にて
も久く成想仁吉の岸の姫松幾代絶
ぬらんやえ明神玉のふそと押関
て赤衣丸妻の童子小現して内信音あり

じつものもと更の志は波端籙の久き世あり
いよいよちめてき世時二巻の書も業平に
たぬびる二男宰少将滋春小傳ふは心
を善能の和記し書て云息男滋春は
父公の遺筆に加一丁くは業平はの
以幸より奥ツクリもやとは傳え和歌の奥伝
好色の道ミチ也云但滋春一卷とは傳て
今一卷不傳其故名今二巻の書は道の

与真儀に如く天照大神に在る仍業奉
仕時より延喜まで又代の朝小世々又代
清和陽成光孝宇多醍醐也而も延
喜の山内粟田の中納言藤原の兼隆卿も
伴路大神宮の執使に在ること村兼隆
の妾忠より大神宮より一巻の巻札紙と
する是て後より凡之錦の巻も入たる也
ありしをよめて御門小養也別を今

の秘事也甚よの後今にむす之代は朝
家の重寶として今二傳にあり但し書
朝家も傳に三説あり一よハ兼澄も友
志保二小は依津説直鏡宮より取出之
と云三小は彼秘書入たる小車錦の袋と
公家も代はぬいにて遣げり延喜此の時
ぬいにて之と取出るとに王才毅見立
留て天下小傳存すとも云世事實依は

仍延喜の丙時沖門始て彼書と丙覽とて
和歌の深淺よと知食け道とをこゝと
右今集を撰ひけりしは是ハ今此伊達と
もの哥ハ八代集のをこゝと也有深淺を
次りのふの哥よあはるなり是亦能撰
雖女今取歌伊達和語の音也伊達和語
よ云く二集の後此方(業平)はいら此
くつりより悉て知しひけるを照宣云

基經是を聞てはる世のさへ不隠便や
て彼通路も武士もよきてきひく母
らくける業平せ力かよきてあひ
奉るに或時行てひまわうわひけれ
をほよもの賢くさあははひまきさ
ぬくて今亭はいつの通路の関守實
くしたうちも祿あんと云一首の奇成
讀たもなれんたけき武士をばひて

の新梅も花下りて春海原とさくら花よ
棹滴凝堅て成一鴻路鴻を也二神
け鴻よとる居て嫁に給て奉生一女二
男と云へし心の日本国開始いさかき
いさかきの言夫妻神とて始て古を
造るく彼路路國八鴻と云ふて妻
神とあとのけ男神ういふて嫁
と云へし

焉の御方へ并と讀てなむり也甚并に云
 扇羽玉之我思髪母不乳結定余實也
のたまふのわらうもいふれずじまひはやくたす
 之も枕我卧毛見と也げ吾我朝小大
 和朝の始最初也をも天地ひげり
 まわける内いてきなりと云也同云後續
くにはんこちのみまよ
 かに傳云國常立焉始と云(り吾と國
 常立焉の吾日本記よ不見必はの始

裁答いさかきの言と國常立の言と事
と性と不同小てうあせ只一神の上此
二名也其心ば別らん爲の國常立の言
始とのらや難云國常立の言ハ天神の
始いさかきの言ハ天神の終也と其代
色と參差せり必向一神の二名と云裁答
天は有八神別八所の精也是と其言
其於神と云皆虛空徧滿之神也所謂

きんぎょの二の意何人哉答云日本記
室中物形必草貝を始也是面足
意のり也是別前二取云大方之道の意
もてハハの精小て未至形脚也今此
面足と者ハハの性ヲ^{たしな}丸て一^つ意也感
圓古との成形やうく相小形て屋堂
現也面足と云ハハの形小始て成
意也と云ハハの形と云ハハ彼一^つ意

堅て脱し國七とありすの事也信し果
記し伊寧諾と書てたのこもくとも伊
寧諾とは種とさじしやん天れお
りの種とおさめて國七とありしやん
二諦和合の娘とされし國いせり父行の自性
の娘也伊寧諾父行の相小聚る娘なる故
に一郷の吳名とてある也問日本紀伊
伊寧諾伊寧諾の事生一女之男云り一女

三男去離人哉答一女者天照大神之男
八月神蛭子素盞烏也難云天照大神
と一女と云るは明、天照ハ日本記ニ天照
大神靈仁天皇の御宇三年小伊豫國
六十鈴海の氷と云、難乎云、夏、靈仁弟
この婚交通子肉親と云、其、所言と云、
女神と云、し、し、は、春、毎、宮、と、云、の、大、小、小
宮、也、也、向、答、是、ハ、日、神、ハ、相、名、小、て、去、同

又陰陽の二儀を合する也。然して日本記
に二神又曰と生と云ての奉宣も免
たし。され天照大神の相名を可有二
神云ゆらぬ也。信之彼大神又小内文
外文とて二社并崇之。内文の陽神外文
の信神也。亦本地大目と云。惣名よて胎
合まぬ部合たなり。一仍し。外文を
尊とす。内文の陽神を向てす也。外文の

陰神の風の文とて陽神と也問云
若し余の陰神の二共可聚甚名し何
う一女を奉哉答云天地の二を陰陽と
ふ故に天照大神 日本輔佐神として
國土をまゝに治ふ故に地の陰ある故に陰
と號て一女を奉也と云次に男は月神
蛭子と云ふのとて月神といふ鹿嶋の木の神
との名目不明神也是の氷神也といふ者

や智の苦慮もあてはまりとも別れる
故に月神天照大神のほりもしてま
と納めたりしこの天のこゝろ根のまを
次は鯉子の三男の苗をまゝ火神と
礼や信じて神の下の位に神と成て是
の二神とあふへもあはげ神生ては而
骨もなぐねりまゝのこゝろ可成長根
まゝの二神をも海邊小枝ま

一、龍神を以て皇祖天神の末裔たる人
 也、あはれむとて是も養子とせしむ三業を云
 何に支正神歟して人のよき一はらば
 匡衡奇よ讀て云 かういふいふ
 あらじと云ふんともせし成りあは
 せしと云ふことかういふは父也また
 二神いふは香もふ念ん是もた
 一して三事成り首を思遣て讀也

備彼姪子参るの一時大神被侍振
汝親よ被侍下位乃龍神の子と成望
され可主國神よあはれ可守民神と
言はれ給作のる指は必西の言ふ
被崇戒之節敷と号とるこそと男
下たる由よ戒と云二神の三男小由る
故三節及とらとや尋云木の位條諾言
の奇ニ鳥羽玉の我思髪と云(一)と鳥

羽虫と云ふものなる哉答をい奇は
漢朝の詩賦を和けて我朝の音とする
たゞ唐古きは鳥物とは鳥羽虫と云也
仍甚と云いて鳥羽虫の音思髪と讀也
さして白居易の初より暗行不知路馬
羽王う雙うと書りそは秦の始皇のこれ
室として渡角鳥羽王玉掉のこ乃寶を
けり渡角名犀角也是と持つては渡

江の世切号也烏羽玉者妖皇の御時
 吳國よりてみ尺の烏龜素てあの嫪
 あひよ黒き玉あり指光顯國長を割
 せ之友小娘の皇の將軍は健忠と云ける
 人謀り板の大きなる家を造て彼家乃
 中二種々の食糧を造てあゝの安定
 是と食はる龜を造て可入内にとり大なる
 網の袋と造て家の口より張て数多獲

松も折て家の内よ入ては鳥よ追出
出ん時彼網の罟よ入とくくくく
云け東海目の魚計りひとて必甚
操めし文や東遠仍翅のあひり
玉よ取て鳥よけ放つけ玉よおよ
納とハ世間明か病け付又出之世間暗
一別秦の始皇武王と合戦せし時我
軍既よ破て被滅とせし時玉よ出て

世間を暗く居て我乃逃く道なきも
わの王もも亦もも鳥羽をともや秦乃
始皇乃漢代の先祖よ耀鬼も云人龍宮
城より玉も心して莊りたる鉾を元
て出されば鉾代よ傳ふは鉾の末
思儀小は鉾をよ小向るりり自
この方へ向ふれば〇かしてさき
むけも始皇或時武王と軍や一内

湖川と云ふは打落されし落行程は
始皇乃孫伯公と云人歎と云ふは
始皇の行方と云知廣き始皇の妙
なるも尋て迷ひありく程は始皇此
よ被責走給よ彼玉棹を以て始皇に
落給ふは伯公來出て思振るは
自よと云き向ぬ許やと云は向たん
方よ尋て始皇よ思進思て許の許

とあるはけて行儀と餞と志と云はく
尋ねおせぬとまよひ路と云はく餞と云也
次はあめはち開けりするとも云ひ一燈の
をいさむ事のみのもあるは天照大神
國長と云はく一付さるものと云ひ悪神
魔太羅神等の悪神と云はく大和宇多
野の城と云はく八ツ歯と云はく一千七百三
て軍と云はく一付大神大慈大悲云

以思食振之我對惡神致合戮と者
神多滅しぬるしとたはくる難事
とて退らるの事あるべしとす
日神た手の雄との志ま氣き長足ちか致司ちの志ま安
閑王たのゆ仲理ゆ姫ひめの志まげに人を始はりて八
百万の神をと率すて大和國葛城山高
岡原岡元天の岩戸いわとは閑籠ひまり居いり居いる
國七個くに國くにあるより六年むね云いひ付つ日神

ゆ子鴻根見の事其神依は御まきく
獨園中も神に心り信りて疑悲給
天照大神の御神と云はれて八百の神是
も大和至天の名久山は集むる云何神
是庭火と燒天照大神の神形と云は
最初は神降不叶思ふ故に又は二神
別必如言鑄おやせむる、と云初の御神
との紀別目前宮は神宗は小鑄造

なるは内裏の内侍はさうり彼清神も
柳の枝はたてやあまろくの神を風俗
傳ふる樂もさうふて章かたて流へり
そむかしののよ岩戸の内かきけりて
天照大神我と念神のあるさうりて平
力雄のさう岩戸を開せ流ふけ内日
神岩戸ののぬちと指出一流へりて
光くまきて神をのぬ白きろく見

けるも沖見してあゝ面白と被給り
物真あるもの面白と云也極目極天
岩戸を出入して香久山より新白より
一も當飛馬て梅より本傳と見給して
吉柳の系舟とて當のともあること
ハ梅の花笠と云舟波詠一給けり
け舟我朝より一字の始る寂初也これ
と岩戸を出入して空の言を傳き置

一万人の悦ぶ事と云ふとあつらひ
 くともやけい母身いふはつと娘と云ふ
 彼天の言久山と云ふは天照大神彼
 少の影向一語しては能言久くる所
 久言久山と云ふやあまの天照大神と云
 △あまのうまけいいふのく少の妻神史
 神と云ふと云ふ
 是は後頼の初にあまのうまけいいふ

少て素神史祚となるば天照太神す
の光戸は用籠り居し時乳長足教
る史祚とら女居りし是をあのたま
りひちの腋の才ニ生る武見と云へあ
のゆひあぬの銀よみ見のうつくしき
思照給けるよみあのたまのちの
通給と見てうもてよある舟あり
しちのいからる我

海の舟のりきつしとてあはれしは世に字
の始て舟二とんのかへは舟日記の者
あまのりきつしとてあまの志とて
せ給へ付あつしとての通路は志乃
船と渡へ給て神をれ通給ふとて亦
日本記はあまのりきつしとてあまをれ
志とてあまのりきつしとてあまをれ
雨霧と出へてあまのりきつしとてあまをれ

を令生也其の世を傳る故よりいふも
も以天とあまのうきまりとをらさや

△よたつらりるり久方の雨にして

もどせらるひあは始とらる

乞ハ夫婦のこひのこゝろより吾と
よげ人始は志とせらるひあは始と
つらや久方の雨と天よの那とて高岡
丹波をよそゆりひあは夫婦とあり

のりまをきくそるひやふあしあがり
ひあへあえりのみこりあつたし
のきのゆへ方とまの二儀あり天を
久方とまの二儀あり天と久方とまの
伊勢語 伊勢語をもちと送給て方角
も定め給り一冊せきと給ふは
方と書てひさくといふと被給て月
越え方とまの二儀ありと一冊の形

と書けり是ハ月也ツキ也ニ爲るニすレハくレて
 久ク世ト照ス也ト形ヲ有ル也トひトるレの月
 讀マ万葉也ト云ハ秋ノ書之不周空地之久
 形之月尔不盡也目世は念からる也と云ハ
 是ハ坂上師女奇也は身之方也云
 説也二ハの勝形と書けり是ハ天武天
 皇の后乃却日也向て沖つかは出給也
 たるハ念の衣袴也勝の白き也凡

へ給たり。かの寺にて月の出るよ
似る所は幾人若祿丸と云人なる思
ふ御て讀る言あり。若照は月賀
堂之見大君之望隈新之膝形之
色乞よりて月と膝形と云や大君
との玉也も后も云やば言の万葉
あり又うらなげこの言よしきこと云
有三儀一は若女二は我妻之は

羨女へしこの音の英女の倭之撰よ田人
 丸の音よ云 埴照哉難波之浦^ゆ
 因尔^ゆ足^と初天^た英女^あ如^か空^か急^い愛^あ彩^さの面^め彩^さ
 尔立^ゆは音^と英女^あ倭也^わ万^ま葉^は云^ん 若^わ女^に娶^む
 青^あ雨^ま音^な立^た天^{てん}獨^ど在^{ざい}人^{にん}野^の袖^{そで}洞^{どう}返^{へん}為^ゐ
 是^こは音^とハ小^こ野^の小^こ町^のり父^{ちち}常^{じょう}初^{はつ}り音^ね也^{なり}
 是^こハ若^わ女^にの倭^わ也^{なり}又^{また}万^ま葉^は云^ん 粟^あ津^つ神^{かみ}
 哉^や藤^ふの祀^{まつり}踏^{ふみ}ら尋^{たづ}天^{てん}元^{げん} 何^{いか}相^あ摩^ま念^ん

我妻^{わがさい}が^ら方^{かた}不^ふ知^ちを^を世^よ我妻^{わがさい}説^{せつ}言^{ごん}也
世^よの^の神^{かみ}の^の形^{かたち}を^をか^から^らう^うつ^つり^りて^て
や^やく^くと^とあ^あの^のた^たま^まの^のひ^ひ光^{あかり}の^のみ^みあ^あう^うは
く^くら^らと^とも^もさ^さら^らう^うつ^つり^りし^しか^から^らず^ず
み^みく^くの^のう^うた^たの^のき^きも^も清^{きよ}ま^まな^なむ^む
う^うた^たの^のき^きも^も清^{きよ}ま^まな^なむ^む
う^うた^たの^のき^きも^も清^{きよ}ま^まな^なむ^む
う^うた^たの^のき^きも^も清^{きよ}ま^まな^なむ^む

あひどの王やたよ彼人の禮をたよ
いよあひどの王やたよ彼人の禮をたよ
たげくして不願前後ども抱へも
別神代の奇そ不并前好只被云
随讀する振うあひどのの振るれば
登云くあひどの王のよと云り今乃
後報うはの意ハ甚儀也能無家の
は侍ハあひどのの王のよと云傳之家陸

兼も本も書一て一向合の名れは
てまづるこまのあはきよ始と
廿一字の音二首とともも未國也
不定ぬのあも座とあもあ
乃書玉也も定て日本國のこ
活て好廿一字も讀好もな
よわ始とあも也は日本記よ
見くやあ天照を那よとの

暴悪を憚て天の岩戸は籠り居り
しを男子見の事信後天名久し
新向し居りしは村止さのちり
多地は城も捨て居たりしを男
根も千力男の事も大將として彼
をこのちりも可成弁之由日神
の事よ日神のいふやハ汝達向て
及合戦者安定多の神達満り

ど我獨りしてまゝのまゝと可也追々
て只獨向彼城立寄る一千の八箇
の釵と一足よげやうと給は付一千乃
惠神等日神よふ事跡若仍まゝの
おろき獨り成して彼城と居て詠ふ
と憶ありとまゝに程よ出雲國若總
乃里よまゝに居ぬ海上よまゝ見は
一の邊渡よのまゝして居ると思食

板ハ是ハ大地と翻スル爲ニ日月神
の玉ニあじゆる是も我棲と云々
思合テ年少シハ翻爲ニおで經ハ
げ時ニ是爲ル如キ摩の語と云々
仍更ニ居経祖ニ又是の奥中ハ八
の重儼ニ見けし言あやして
以テ是終ニ老翁一人然ニうはる
如きいふして恒長ニありあむ

て問之曰、爾答云、我、天神の末
へ名をいふ、あつらの名、と云、神変
書て、下、男よりして、いふ、く、いふ、い
き、く、は、我、じ、も、ち、く、稻、本、姫、と、云、八、段
の、龍、來、て、多、の、人、と、取、皆、を、盡、て、姫
と、い、ふ、と、い、ふ、る、を、是、と、欲、と、云、是
の、所、に、わ、は、は、さ、ら、の、我、と、い、い、よ、と、れ
彼、龍、と、云、て、い、ふ、と、い、ふ、と、云、龍、云、我

天祚の末也汝といふはよとるもの難叶
但し汝いふる人とも同じの言を我
は天照太祚の弟也不賤身也といふは
夢栖の御もまたたふることとておなじ
ふとのぬも時高八の舟小酒を造り
海も浮て湯角尻松と八つ造ては船
更の段よ差と是の海松根少てはく
るくも也詔既も現して既ハわれ

おそろしき姿やけるゝ八の毎は既に入
て酒小の碑て不知お好碑外なり
是は姫君の面影ゝ八の酒舟は浮ひ
るをも見て酒の女も思ふて飲けるに
や板は姫君の既は是る山はのつま
く龍の既入て飲の龍とくい殺し
て何きよて釵を抜て切之は龍
の尾よりして八色雲を立けるゝるあ

わきまて破てるは目出度釵あり是
と取て日神の御前へ奉て奉るは
御勅當の御行りしこのあまれ村雲
乃釵是や倭高稻名娘と夫婦と如て
手摩の碓は宮造して位行り去
付八重立いづも八重垣裏こめしわん
きほくるうのやうきもと云舟御
是別世一字娘とて中二巻小當是

△ちりやうると云よ才又係天照
を祓よ三の象と云なりし二
は一諸神小付二一切の物
よ分て云也

天照を祓小付く三義ハ一みは天照を祓
一千の劔の齒とけやうりてよまのあ乃
城と落一落一あよ子齒破神と
書げり二みは天の名久山よと治由

御神のきほ—ちよの袖よ若くは
周活目神の出ほ—時沖光ちよ
の袖ふらふもちらやあつとさへ三
よさのちよの金雲玉小位座てほ天
照本神よ世サとして悪邪達と後て
宇多の神^{くぐ}部^ぶよ茅葉の宮と造てた
たへ寄せらりけはて目神千の葉の
えと破く玉ほけり仍茅葉被神

とまは信く去れまよひ今ふまはこち
乃をよとて妙くあり

△次ふ人の世も成てまよひの者乃

まよひ始るまよひなり

是上のいづもやまよひの音もまよひあ
らむ別のゆゑまよひのあは既に歌
きて不及謹説、まよひ彼の神代のゆ
ゑ人の世も不可云日本記とるふ人会

第四代の沖門の由付まじくいつの由も
の音より縁てありし一語又此の音
も廿一字と讀流へりしを尋ふ云
たらむる道ハ山路乃こむくともむら
ぬの岡んこふと志根けーび音ハ王
張の由宇懿徳天皇出雲より幸
まける付音由對面より還流一
付上原と云ふより還流して由名由と

おとく誘はふ舟也是より被交えけ
事後いづひ舟入王の世と成し世字
始る舟一番の舟入友よ人の世と成し
舟の舟もよ始る舟と成し舟の舟
舟の舟もよ舟の舟の舟の舟
普通のあよよこの舟もよ義よ此
舟日神と見舟と新くえ及舟
舟の舟も舟の舟と成し日神と成し

此れは奉りし事なる故に彼らもあつらん
なり日神男根見言も使へりし事
の事なり被給の根は汝我子なる
一事は十月一日被給言公雲石見乃
女必とせん被給けり信之
日神父子の契約とて一語て必約事
十月めけは被給と公雲の言も
信之十月を被給月とて是也

は道の経信の奇よ 心をあつた神
をいふをいふ神を一月をよめたふ
らん女をすもつとて文造つた稲
左姫とすもんとて半摩つた文造
つとまや潤いつも八重の手の奇は
上よ事聞畢一何は辰の終小をを
書哉答はの上の辰小省へき音あ
せとも南甚一具をきりあはれ

世にのち尊のしりも一版ふるとも
と終小書也不限ぬは事、と例多
△くてうに祀をめでるもうや
じ等と云ふ

是の上は云ふめく代々一字の音知く
きしてよれば道も古小傳ては祀とあ
て多しういむいむ揚ふよせりふれ
と并乃風情多く事と云ふ祀と

あぢもは花乃面白かりやむかひ
わじと云よ有二條一ぬい草の花よ
るはうもして傍らもあまも亦
ちらも花よるもあまもあは
まもは花よるもあまもあは
らもは花よるもあまもあは
まもは花よるもあまもあは
らもは花よるもあまもあは
まもは花よるもあまもあは

勇と初心也と不令早下切替て余未だ
 の如るを去るもいとさうのちりあひ
 ちとら塵端ちりいちと書り左傳云輕君其行
 惡不用臣さかた下譬ハ如風前塵端先立
 云りてちとらまわと云ん

△難波津の奇ハ御門の御始等と云
 是ハ御門の御始みまハ非武天皇少光座六
 け時難波の始と云候ふあすけ

哥ハ仁徳天皇の御時の哥へされハ天皇
乃即位の始の哥と云ふ事ハ應神
天皇ヨ曰クの西子彦と嫡子二流然レ其の
王子と云ふ二男ニおほク王子ニ男彦
乃王子曰男難波はの王子之面を應神
天皇位を弟曰の西子難波はの宮に
奉讓彼御子我ハ末子也非一即位と
て兄の二流の王子ニ譲二流王子ハ

我を受讓と申可受位とて三福
て三多とて必し王なり終は難波乃王
まけて位よつき終へしは時百齊國
よの來て王仁の大臣。も位よ分ける
ことと不慮しては奇波讀て終
難波は時やけ花冬こもり今は
まくと時やけ花と後已しは難波は
の御子受讓あれし時の花と後る也

より思てとも御即位不審小思
てともみえ仍御門と難波津の帝
とも仁徳天皇ともあさまきの御門
ともトけり皇太后賢王小てた也
け音懿徳天皇の御内の大らふみ
奇なる十二代の乃絶るると仁徳
天皇の由内世一字又始て續かぬ
御門乃御始とも也 後香山乃奇ハ

米女乃戲より讀とは萬本乃もなきと
始て橘乃姓をとめて大政大信と如て
陸奥列乃かきにて下治けるに近
かりけるはあ誠思て具して下
は必乃めて此らるゝとて志るの信
けれどかきけりて一者の音も傳
あなきいふは 後名山陰とて
山の井のあきくく人も思わぬとて

心の大臣なりぬる乃執掌つるごとく
自志あり好むにあはくもんを好む
ともある心ありて好むはけ音いと
ぢてらうらやけ治るや葛本の木君
天智天皇乃御子へ米女ハ藤原乃
富士の雄乃むむちへ山の井ハ必あさき
み小彦へをぬいふ深げしとと
木の葉ちのるほとたに自発小あ

さくまろいけ音の難波はる音はほ飛
一字の音終く天智天智の御付を
廿三代せうるいけ御付又うしめ語と
ほ廿一字今ふまて不絶ぬ音
乃ちいふとも又もいふ人乃
始ふも志けるといひ音より相續
てしよふ終ぬとふ成とさる
△音のともは六儀ありとさる

奇小六儀と云ふあるに 如く此奇の詩
 也周立乃詩小も必六儀と具する其
 六義の風賦比真雅頌也始風と云
 う急奇の心はふゆとくしてしと物小云
 ちりてと志とあつても也譬の其色
 と物も物よわけて姿と影と云ふと
 風乃奇と云ふ本奇めは上野彼は
 を出へ彼奇の心は仁道天會の御

あつね涼のふきりこぎるの冬もま
ふふまへ又けつ花の思はくこのあ
ちきなきいふよこひまの人もま
てまらつたまもあつねのまはれ
の音もまへ笑花の思はくこのあ
ふなりあつねのまはれ
しきまもまへ
乃系あつね

冊と書けりこれしつゝあかひに
いへ伊勢物語の芳着と書けり是の
いへる意や万葉のけい也而と今古
今に云取の女をたもつと云と云文記
乃録云相如野草の庵食蓬経年序
忽と忘^{てい}常^と抱^い脱^つと云り文の意の周の
菟王の御時穆王乃異名之馬相如と
云人の依^り実岳岸と云野^の流^れと

て蓬を食りて九年を送ばる政惠と
云三十卷乃文政化て御門は奉命御門
乞ふ由免りて賢者也智者なりとを
車と以て迎へ兩挑政の臣は被用され
と野に居て世帯を執りたりしが
今ハ忘て悦ぶといふことなり付は文右
今ハ及世帯をりつきて之今乃そ
花乃奇は大伴忠直の是後終は

音と難ぶるは是れ事之雅也、音と
可奈何、賦の音と云哉、云は難む南
取論は音よ三の心と云り、を後
不覚悟加は難強、頗不可指南、二
比乃音、是の音と云、心は物と云
ツ、音とて是の對へ彼は音と云、心と
歌も、和音、又は今朝、乃、我れ
たき、といか、と、云、さ、い、ま、に、ま、く、わ、わ

らんその大伴乃家持の音の心は霧は
たきしてたけく消るぬは我人をも忘る
よし類もきくぬるもさるせ気別
物もなうくて心を歌とへをを倭
又類して云比の音の物も二つ並てを
と彼は似たりと傍へ而もぬは本音
者霧消ぬくもさるも消ぬる
とあくるもぬへ比乃音の相けり

とを不覚たらしむる親乃ふこれ
まのこりといふせくもあるいたた
まはと云る比音へ相付ふるん音の心
かひいると云虫の眉の中は麓下とい
がせく思振よいもにあらず不審と思
ひのかかりぬへは比の音とせ云は又
後頼の難嶋をい謂前乃音も今比
音も共よ抱よあてらむあはれ

予更に世智留之何う前流音を此見
や四よ真乃音をよいたとく音と云へ
乞の物と二並くと而も膳方と云ふ
人多く比真を同根と云成り理不
盡乃事也本音ぬハ我と云ふも
つさ一あやう海乃流のま砂のま
ほくもとも立りげハ文屋の朝康の音
へ先ありや海と云ふ二條あり一ぬは

幾海と書り万葉小云 漢語流海は鉄
 留る笠岳野越方見れば岐去海有元
 と云へし是を流也二海は有流海也
 書けり同集より有流海之流は所
 居ぬ所乃青也時為夏波寝に云
 と云へし是は丸の号に仍今乃号の
 あらうのの砂の多くしむるは
 てんらの心農くすむる人

とよあり弁勝芳心見たるも五よ雅の
哥といたること音こまんとをいんも
詞もたききとまんとをいんも孝経小
雅小旻の童とまんとをいんも
きと傍の本音よ偽のかきせあり
せばいりり人のことのもうけ
ときりこまんとをいんも雅の音と
いんもいんもいんもいんもいんも

き音をいふに先音とてうきけし何
う雅と云義をいふ業又不得其心其
姿心詞興は重きと云之質音と云た
しうて雅すかともいふる音也云之せら
別櫻は被非雅事 非沙法之傳即
汝らは川本音は山橋あくまを色を
つるれ等云へるは只者政の流言乃
音と云ふるなり又は非雅音執自義

不可被似類言六ノ頌の音との祝の
音へ物も只大方ノ祝乃字は用おは
上申下も祝言へすと今別て頌乃
字を用おは必上といひ君といふ
よ用之也文選云鳥君政翼のつばさ翔四海
賢政惠の雲覆千万峯さかさハ万民集
此上百信守下也言ふれしけ頌
の字の上城頌よ用セ本音にハ殿ハ

ハ兵上の如くして
祝の義不闕 春日躰る
つ万代といふ
吾頌の吾とん
若菜と摘て春日
君の御事ば祝
吾とん
頌の吾とん

されし殊もは殿の音頭哥は相けて
賞のしは殿の業へんちり幸北義
て何事そや難んは難也

△今乃世中いろふきんれん

花よなるともさう

昔の人丸赤人むくの皆音れ實に改
て文よあるさる祠一つのまき一而
今乃世の人とは祠よるさり色に就

し吾らも知らず好色の家といふ
の非男女艶粉の好色之家ニ有徳道
必吾らも中々知らず吾らの道と傳
る處は好色とらえん じよれ本の人志
さぬらうとらえりしもの家は傳る徳家
の家の為重書く故に秘教之我家
より外へ出さぬは世の人不知之
じよれ本とらえりしもの家は傳る徳家

本二枚は座本三枚は右本と書りし流
本との必水も流るるものにあす
或の枝志けき本葉にこりし或はうむ
らるんとにうりて隠れる本をむ
き本と云や二は座本の水の座も流
る右本も流るる流云也順和を葉
席云麓山の南大井川の邊より座
本葉花あて好送之哉春書けり

ひき乃とらちてはる唐より外ふ不書
や古木の事櫻田の利根中坊の家集
よ云 秋風の吹碎てや古木の跡を散れ
く葉波散覚とまりまかりと云々
又者三義一はは碎二はは枝折三はは
温や文屋康秀の吹くしのくはる木の
枝折のひびく風波風と云んを讀
らるゝ木の枝乃折らる成志の事云

や下めらるはとの實はと云他、音の成を
知るべし、小生も、手に此書と、歌出と
書り文集云、江水常に、そら浮木と未賢
主虚天長、くは信世出、あ慕政主も、た未顯
以先、あ春、あ知事、あと、あきり、あされ、あやに、あ
ら、あと、あは、ああ、あら、あと、あき、あよ、ああ、あと、あと、あ
み、あく、あ書、あ始、あと、あと、あく、あと、あく、あん、あ
ら、あと、あと、あの、あ昔、あの、あ音、あれ、あ讀、あく、あ乃、あ甲、あ乙、あ六

△右乃よまはし御門等と云ふ

乞ひ右の宗氏乃御門へ別聖武 孝謙
桓武 平城の宗氏の血つよ万葉と撰居
りと云へ先聖武天皇の血つ橋の記兒乃
御干時中納言後ぬか高た大臣又中納言
大伴の家持は二人よ信守居て万葉と
撰居り其比乃号まして僅よ二の首
と集出の血つ云へ此のそ撰居りたの

此志るれども其サリて不満足也垂公翁
卿之後孝謙天皇の西村回き撰名
と云て六百首は撰と、その後孝謙崩御
諸兄又回薨と仍稱徳泰帝光仁は
三代万葉の女沙流^社は光仁西村家持
又卒と、その後桓武天皇の西村は諸兄の孫
孝良丸、一男回舎人橘の流友と撰名
と云て又再集して六百首は撰と、流

桓武崩沖之浮平城乃沖内以同推志
七千首之定て世は弘ち延へて尋云方
葉の反は平城の由も書けるは何れ
この事哉答其多きとよハ葉武の
事と世は弘る時代とよハ平城天皇
のころに唯恐平城の由より弘事
代と書よとて知ぬ平城天皇と書方
葉主と書の花乃胡秋の月と云らに

まふ人しむりて身とせしむるは
は聖武の由内。諸兄家持人丸赤人等
也孝謙の由時は懐人郎如桓武の由内
の秦の是樹清友嗣安陪舟舟田は乃
人丸け人しは石ては花よつけ月あを
て身とせしむるは

古今序聞書 上 (後表紙ウ)

